田中　希生
レッケンの歌
――ニーチェに寄す――

[Essay]
TANAKA, Kio
A Song of Röcken: to Nietzsche

A Noon of Liberal Arts, No. 9, 2019

どこにいてもストレンジな気分になりがちな、面倒な性格の自分にとって、自分の生きている時空間に対する愛着を表明するのはむずかしい。若い頃はもちろん、これからも簡単ではなさそうである。どんな人生であろうと、それ自体が苦しみだという言葉に、救いを見出したくなる気分に襲われることも多々ある。

しかし一方で、ここではないどこか、今ではないいつかに希望を託そうとも思わなくなった。狭い日本ではなく大陸に、とりわけ西欧の歴史に抱いた少年時代の憧れは失せた。どこも同じである。現代社会はどこも苦しげだ。いつ終わるとも知れぬ人生、なにか仕事をせねばならないとすれば、はじめの一歩はどうしてもいま、ここからはじまる。それだけは確実だった。

外の世界への漠然とした希望は竟(つい)を迎え、いかに内部を外部に変えるのか、それが私的にも公的にも自分の課題になった。褪せた日常の一歩ではない。これから刻まれる第一歩を、言葉の真の意味で真新しいものに、いかに変えるか……。

旅路の第一歩を、精神上の故郷からはじめるのは、正しいことであるように思われた。人生のうちで、どうしてもヨーロッパに行かねばならないとすると、あの場所からはじめるのが正しいように思われた。

すなわち、ニーチェの墓前である。

＊

墓は、レッケンというごく小さな村にあった。さる日の夕刻、ベルリンに着くやライプツィヒに向かい夜をそこで過ごすと、早朝、バッハのいた聖ニコライ教会に挨拶をしてから、ヴァイセンフェル

スに向かう。貧乏旅行である。路銀を節約しようとバスを探すと、距離上は回り道になるが、どうやらそこから出ているらしい。だが、着いてからその手段は諦めた。一日数本しかない。逃すとあとが大変である。けっきょくタクシーに乗り、レッケンに向かう。

途中、親切だが訛りの強い運転手の話をラジオのノイズのように聞き流しながら、景色に目をやると、ぽかんと広がった農地に呼応するように、あっけらかんとした空がひろがっている。視線の先、地平線を遮るように、おそらく十数軒ほどの石造りの家々があった。漠とした空間上に散らばる孤独を恐れるようにひっそり寄り集まっている。

教会に着いた。父カール・ルートヴィヒ・ニーチェが牧師をつとめた教会はさっぱりしていて、そして寂れていた。

*

ニーチェに触れたのは高校生のころである。未来の社会のどこにも自分の居場所が想像できない、そんな孤独のなかで手当たり次第にふれた書物のうちに、ニーチェはいた。そのころ他に比してとくべつ重みがあったわけではない。重みを増したのは大学に入ってからである。古代ローマへの熱烈な思慕と、自分の生きる近代への関心と、そしてニーチェとが、精神のなかで拮抗するように育っていった。

歴史家にとって、どのような時代、どのような地域を専門とするにせよ、地球上を「ヨーロッパ」の精神が覆い尽くした近代という時代がいかなるものか、それを自分なりの観点から思考する作業はけっして欠かしてはならないものである。古代ローマ史を専門としていた自分にとってはなおさらである。

個人主義や民主主義、主体や責任、公共性や民族主義、自由主義や共産主義、人間主義や歴史主義……。意識してであるにせよ、無意識のうちにであるにせよ、われわれがそこにとどまりがちなこれら「ヨーロッパ」由来の観念に対する批判なしにおこなわれる歴史学は、歴史をどこまでも擬似「ヨーロッパ」的に描くことで満足する。

その点、「ヨーロッパ」に対する根源的批判を展開していたニーチェが自分のなかに生きていたことは、非常に大きかった。

ニーチェ哲学の正確な理解は専門の研究者にゆだねたいが、ヨーロッパ中の非ヨーロッパ、一九世紀にはこれ以上ないほど世界史的激流となったヨーロッパのただなかに立つ孤独な欄干、それが自分にとってのニーチェだった。激流のなか、流されそうになりながら、手を伸ばしたその先に、ニーチェがいた。いまから思い返せば、自分は自分が思っているよりもはるかに必死の形相で、ニーチェという欄干をつかんでいたと思う。

それからは、学界に居場所をなくしがちな自分の不思議な羅針盤になった。どれほど孤独でも、またどれほど貧しくとも、ニーチェという欄干だけは手放さないでおこうと思った。といっても、ニーチェを保護者のようにして依存する気分ではなかった。むしろ掴んでいることが、かえって自分の孤独を運命付けるような、そんな欄

FRIEDRICH
NIETZSCHE
OCTOBER 1844
AVGVST 1900

干だったから。反対に流されていたほうが、ずっと楽だったし、孤独も癒えていたかもしれない。

ニーチェは、それはちがう、という気分に勇気を与えてくれる。たとえ独りになっても、否を貫いていよう。それどころかみなが無関心を突きつけるそこで独り、肯定（ヤー）を呟きつづけよう。自分の学問は、そんな風にはじまって、現在までつづいている。

やがて研究は自分の立っている足許を掘りすすむように発展しはじめた。純文学にも感謝せねばならないが、近代日本にもかつて世界があったと、そう感じるようになった。もう「ヨーロッパ」には用はないと思っていた。だが、もっと新しい学問がしたくなったいま、ニーチェのことが思い出された。ニーチェにひとこと感謝を述べたかった。そして欄干から手を離し、自分の力で、泳ぐ……。

*

レッケンの教会で自分を迎えてくれたのは二頭の山羊だった。こちらをじっとみて、まもなく関心を失って、草を食みはじめた。自分はまだしばらく彼らをみていた。

探すとすぐにみつかった。通りすぎていたらしい。建物のそばに、父母や弟妹に並んでフリードリヒの墓碑――。本物のような気がしない。すくなくともニーチェの望んだ形ではないだろう。頭のなかで、嘘のような気分になる。だがにもかかわらず、心は動揺している。われながら可笑しいが、あれほどおしゃべりな自分が、心中で墓碑を読んだ以外に言葉が浮かんでこない。念願かなって訪れたニーチェの墓前で、ぶっきらぼうに押し黙っている。

実らぬ恋の告白前の若者が、やっと現れた想い人を目にするやそこから隠れるように、教会の周りをうろうろしはじめた。教会の入り口がみえた。白塗りの、しかしずいぶんささくれた木製の扉に鍵はかかっていなかった。ドアノブに手をかけ足を踏み入れるや、けたたましいサイレンの音が村中に鳴り響く。入ってはいけない場所に入ったと思い、慌てて外に飛び出した。それが午後三時を告げる時報であることに気づいたのはしばらくしてからである。

ヨーロッパ的観念と、それに対する内在的批判がある。自分にとっては、後者のほうがずっと普遍的である。いや、普遍という言葉にすらヨーロッパ臭を嗅ぎ取ったニーチェのいうように、ややぎこちなくとも「反時代的」というのが正しいだろうか。すこし気を取り直して、もう一度教会の入り口をくぐる。

薄暗く、すこしカビ臭い祭壇の前で芒としながら、早朝、聖ニコライ教会ではからずも聞くことになった賛美歌を思い出した。賛美歌というより、一種の声帯模写だった。すれ違いざまににやりと笑った、若くも胡散臭いあの男は、美しい声音を発した同じ唇から、調子外れのラッパの音も漏らしていたからだ。神はいるのか、いないのか……。豪華なパイプオルガンのある教会にくらべれば、ここはまったく寂しいものだ。ふと、神がいるかいないか、そんなことは問題ではない、といった表情のニーチェが浮かぶ。外はよく晴れていた。

♈